

入中1年人権だより

徳島市 八万中学校
1年生 第15号
2022年 2月22日
編集・文責 吉成正士

(14号からの続きです)

今の自分以上をめざす生き方

■みんなの発表は、「なぜ地域によって差別されなければならないのか」や「生まれてきた場所だけで差別されるか、されないかが変わるのはおかしい」というふうな感じで、私の意見とほとんど同じだったので、やっぱりみんな同じような意見になるのかと思いました。差別は今でも同じようなことが、学校の中などでいじめとして起こっていて、いじめる人たちは自分より下の存在がいて、自分はまだこいつより上だから大丈夫だ、というのを自分に言い聞かせて安心したいのではないかなと思います。心のどこかにそういう気持ちがあって、自分より下の存在がほしいと思っているのではないかなと考えます。なのでこれからは、下の存在がいると安心するのではなく、まだ上がいるからそこに追いつくように頑張ろうと考えようと思います。

みんなの発表で、人はお金のために働いているという発表を聞いて、私のお母さんは、この仕事が好きだから今の仕事をしている、と聞いたことがあったり、お金をもらわずにボランティアで信号や危ないところに立っていてくれる人がいる、という事実があったりするので、必ずしもみんながみんなお金のために働いているのではないかなと思います。(4組BY)

人権学習の教科書「わたしの願い」のなかに、「自分以下を求める心」という資料があります。その資料を想起させてくれます。

「自分以下を求める心」

あれは、小学校二年生のことです。私たちのクラスに、よくいじめられる女の子がいました。私も、他の人たちと一緒に、いじめては笑っていました。その頃の私の気持ちは、「自分以下の存在が欲しかった」のだと、今になって気づきます。あの時のあの子が、もし自分だったらと思うと、今までいじめた人に対して、あやまらなくてはなりません。

自分をみがく努力もしないで、ただ自分以下が欲しいだけでいじめるのは、やっぱり差別ですね。部落差別やいろいろな差別について、たくさんのことを勉強してきた私ですが、実際の生活ではそれをまるで生かしていませんでした。なんか今、考えてみると、「なぜあの時、あんなことをしたんだろう」と思ってしまいます。

思っているだけ、悪いと知っているだけでは、すぐポロツと言ってしまうと相手は傷つけたり、がっかりさせたりしてしまいます。

どうして私はこうなんだろう。やっぱり、自分以下が欲しいという気持ちが心の底にあって、それが作用しているのでしょうか。……………

資料はこのあとも続いていくのですが、最後にはこうあります。

「今の自分以上をめざす。そのために全力で生きる。他人のことをとやかく言わないんだから、ほんとうに仲間として力が合わせられる。」

感想文と同じことが書かれています。つまり、「向上心」が大事だということです。人を見下すような下らない生き方ではなく、自分を向上させるような生き方をしていきませんか、ということです。みなさんが行った合唱発表会は、まさにそうでなかったでしょうか。

また仕事については、お母さんのおっしゃる通りだと思います。「好きだからやっている」これに勝るものはないのではないのでしょうか。

毎日のようにニュースから流れてくる事件。ある事件で逮捕された犯人は、「金があれば何でも手に入る」と言っていたそうです。そんなことはない！と思うものの、犯人はそれを信じたのでしょう。愚かしいと思いますが、現代社会の価値観が生み出した犠牲者のように思えます。私たちも、そんな社会の価値観に流されながら生きているのです。

でも感想文のお母さんのように、「その仕事が好きだからやる」という価値観で生きることができれば、どんなに気分が晴れやかになるでしょう。いろいろな価値観があっていいのだと思います。お金がすべてではない価値観。そんな多様な価値観が、コロナ禍になり、SDGsの推進もあり、働き方に対する見方が少しずつ変わってきてるように思えます。みなさんも今一度、今の自分の価値観を見つめ直してみてもはどうでしょう。そのときに、又四郎の、命や物・金を粗末にしない生き方は参考になるかもしれません。

燃え尽きることの無い熱を

■僕は今日、人権学習をして、この人権学習はいつまでも学び続けなければならないということを知りました。中世の差別について思ったことを語り合ったりしましたが、その学習の熱が燃え尽きてはならないということが分かりました。吉成先生は教室に戻って人権学習が終わっては意味がないとおっしゃっていました。これは、人権学習をずっと続けなければならないということです。僕はこの言葉を聞いて、もっと集中して人権学習に取り組み、その学んだことをいつまでも続けていきたいと思いました。

今日、差別とは命や物・金を粗末に扱うことだということを知りました。それらはとてもいけないことだと思いました。昔、差別を受けた河原者の人たちは、とても悲しい気持ちだったと思います。しかし、差別を受けながらも一生懸命生きている人たちは、とても素晴らしいと思います。だから、その人たちを尊重したいと思いました。これから僕は、差別などの噂に流されないようにしたいです。また、今日学んだことを生かして、これからも独自で人権学習を続けられたいと思います。(5組HE)

人権学習をしていて私がいつも伝えたいと思うこと

は、差別の中を生き抜いてきた人たちの素晴らしさです。

みなさんの人生も、順風満帆なときばかりではないでしょう。思い通りにいかないときも、苦しくて泣きたくなるようなときもあると思います。今まさにそんな中にいる人もいるかもしれません。人間関係や部活動、勉強で苦しい思いをしてる人がいるかもしれません。いま、受験で苦悩している先輩方は、2年後のみなさんの姿です。そんなときに、物事をどう考え、どうふるまえばいいのか。逆境の中をどう生き抜いていくのか。それが、差別の中を生き抜いてきた人たちの中に、ヒントとしてあるように思うのです。これは、これから生きるみなさんにとって、大きな励みになるはずで。そんな生き様を学びとり、それぞれの人生に生かしていけるように、今しっかり学んでおくことをオススメします。

ただ、「独自」で頑張るのはなかなか難しいかもしれません。頑張ってみてください。でも、ひとりで頑張ることの難しさが分かったときは、「仲間」の存在を思い返してみてもいいと思います。そもそも人権学習は、「自分一人でやり抜く力」と、「みんなで協力する力」の両方を大切にするものです。熱は冷めます。自分の中に、「熱を生むエンジン」を持たない限りは。だから、一人で無理なら、また熱が冷めたと感じたなら、周りを頼り、熱をもらい、自分を奮い立たせることです。それが、「仲間」というものです。そんな、本当の「仲間」をつくっていくことです。あなた自身が、誰かにとってのそんな「仲間」なることです。

不足を向上心に、強さに！

■今回の学び場で、これからの自分を明確にもてるようになりました。それは、「学び続ける大切さ」を学んだからです。僕は、又四郎は限られた労働や時間のなかで工夫し、努力し、技術を得たと考えていました。しかし、又四郎は満足せず、足りないものを知って、それを要求するのではなく、それから自分をどうすればいいか、向上心を抱いているということを学べました。又四郎はその向上心が強さにもつながっています。だから僕はこれから、時間の中で何事にも努力する。その中で自分に足りないことを知る。足りないことを向上心につなげられたらと思いました。満足しないということは、足りないことを知る。そうすれば、自分の弱さにも気づき、向上心をもつことで、自分だけの強さを身につけられると大きく学びました。この学びは、今考えただけではありません。何回も改良して、学び続けたいと思います。これまでの学びは、自分をよくできる、納得できるものになりました。（5組SH）

又四郎たちの生き方から、自分の生き方を学びとったようですね。「先人の生き方に学ぶ」とは、こういうことです。だから学ぶことはおもしろい、そう思います。

勉強を嫌がっているあなた、本当の学びとは、おもしろいものなんですよ。被差別の中を生き抜いてきた人たちの生き様は、特にそう感じさせます。善阿弥や又四郎もそうですが、ハンセン病を生き抜いた人たち、在日コリアンの人たち、セクシャルマイノリティの人たち、ネルソン・マンデラやマハトマ・ガンディー、

キング牧師。学べば学ぶほど、勇気が湧いてきます。私もそんなふう生きられたらと思います。越えることはできないかもしれませんが。それでも同じ人間として、「負けたくない」と思います。そんな思いにさせてくれるこの学習が、私は好きです。

自分自身で考え、判断できるように

■私は中世の人権問題(部落差別)について学習する前は、自分とは遠い存在で、難しいものだと思っていました、なぜ今さら昔の話を掘り起こすのか、知らない人に伝えるのか、疑問に思っていました。けれど、実際に学習してみると、学ばなければ、知らなければ、差別は繰り返されることを知りました。中世の差別を知る人がいなくなると、一時はその差別が「なかったこと」になるかもしれませんが。でも、中世にこの差別が生まれてしまったように、いつかまた同じことが繰り返されるように感じます。そのためにも、歴史を伝え、広めていくことが大切だと思いました。

自分が「おかしいな」「だめなんじゃないかな」と感じていても、周りはどう見ているのか、どう思っているのかにとられすぎて、自分の中の考えが違う方向に変わってしまふことがあります。そんな「他人に寄りかかる見方」をしないで、これからも自分自身で考え、判断できるようにりたいです。（5組YA）

日本人は特にこの意識が強いようです。コロナ禍になって以降、よく言われるようになった「同調圧力」とか、「横並び主義」といわれるものです。決して悪いことばかりではないのですが、それが悪く働くと、周囲のことを気にせずには行動できなくなってしまいます。そういう姿を見ると、「自分の考えや意思はないの？」と感じてしまうこともあります。確かに、周りに流されて生きていけば、何も考えなくて済みますから、楽と言えば楽です。そういう生き方も認められていいはずで。でも、日本人はあまりにもそういう傾向が強いというのですね。

私たちも、ニュースや新聞、ネットの情報を鵜呑みにしているようなことはないでしょうか。そこからして見つめ直す必要があるのかもしれませんが。もっと多様な意見や考えを交換し合いながら、自分の頭で考えることです。善阿弥たちがそうしてきたように。

「そんな昔のこと私たちには関係ないし、それに難しくてよく分からない」と、無関心に遠くから眺めながら、「それにそっとしておけばなくなるのに…」と、あくまでも他人事に終始する意見があります。「寝た子を起こすな論」といわれるものです。「寝ていることをなぜわざわざ起こすのか。そっとしておけばいいじゃないか。起こすから差別が残っていくんだ」というものですが、果たしてそうでしょうか。くしくも今回のコロナ差別が、そうではないことを証明しました。人権についてしっかり知る機会もなく、中途半端な学びになっていた結果でないか、確かな人権感覚を身につけていればそんなことはなかったのではないか、と思ってしまう。学んでいなければ、歴史は繰り返されてしまいます。そうならないために、私たちは学んでいるのだと思います。（16号につづく）